

第二十三回 新城薪能

とき 平成二十四年八月十八日(土)
午後四時始
ところ 新城文化会館大ホール

能組

仕舞 七騎落 杉野 莉子
芦刈 長田 悠那
八島 川村 美幸

仕舞 巴 村田 昂平

連調八島

栗佐 藤陽
粟谷 明生

中西 深雪
小林 寿枝
伊藤 秀子
永田 聡子
星野 弘子
今岡 アイ子

小舞 よしの葉 佐野 泰三
宇治の晒 小澤 貞博
道明寺 水谷 至男

仕舞 養老 榎本 奈月
三輪 本田 洋子
葵戸 岩崎 葉子

狂言 雁大名 大名 清川 松佐

太郎冠者 山本 勝
雁屋 酒井 淑規

後見 山口 俊一

あいさつ 新城市長 穂積 亮次

午後5時頃

午後4時30分頃

午後5時40分頃

休憩

火入式

新城市議会議長
新城市教育委員長

夏目勝吾
川口保子

仕舞

蝉丸 太田温子
羽衣 中西深雪
六浦 伊藤秀子
網之段 小林寿枝

午後6時15分頃

狂言 因幡堂

男 天野雅夫

女 加藤久和

後見 山口俊一

午後6時50分頃

能 黒塚

後シテ 長田共永
前シテ 中嶋康夫

ワキ 渡辺敏康
ツキツレ 櫻本泰朗

間 加藤賢一

大鼓 清水利高
小鼓 森田收
大鼓 鈴木崇史
笛 今泉英三

後見 粟谷明生
太田康弘

地謡 太田研司
竹内省吾
粟谷能夫
栗谷邦生
佐藤陽

附祝言

(終了予定 午後八時頃)

主催 新城市

新城市教育委員会

主管 新城市文化事業運営委員会

新城薪能実行委員会

後援 新城市観光協会

あらすじ

狂言 雁大名

訴訟ごとがかなって、都から帰郷することになった田舎大名が、都で世話になった人
たちへお礼のご馳走をしようと思いつく。

肴を買ってくるように命じられた太郎冠者は、街へ出かけ初雁を見つけて買おうとす
るが、代金の持ち合わせがない。出直そうといったん帰り、大名に相談するが、大名に
もお金がない。

何とか初雁を手に入れなければお客をもてなす肴がない。そこで太郎冠者は大名と示
し合わせ、作り喧嘩をし、どさくさに紛れて雁を取って逃げる事を提案する。さて、首
尾よくいきますかどうか・・・

狂言 因幡堂

妻を離縁した男が、新しい妻を得るために因幡堂に参詣して妻乞いの祈願をする。こ
れを知った妻は腹を立て、一計を案じて、参籠中の夫に、「汝が妻は西門に立たせておく」
とお薬師様のご託宣のように告げて、自らが新しい妻になりすまし、西門で待つことに
する。

霊夢だと思ひ込んだ夫は、新しい妻を授けられたと大喜びで連れて帰り、末永く仲良
く暮らそうと訴えかけますが・・・

能 黒塚

東光坊の修験者、阿闍梨祐慶は、同行の山伏と共に修行の旅をしていた。ある日、人
里離れた安達ヶ原で夕暮れを迎えてしまい、一軒のあばら家に一夜の宿を頼みます。あ
ばら家には、相応に年齢を重ねたとみえる女が住んでいたが、あまりにもみすぼらしい
からと祐慶らの願いを断ります。祐慶らは、重ねて頼み込み何とか泊めてもらうことが
できます。

家の中で見慣れない道具を見つけた祐慶は、女に尋ねます。祐慶の求めに応じ糸繰り
の様子を見せる女は、辛い業から離れられない我が身を嘆き、はかない世をしみじみと
語ります。夜が更けると女は、あまりにも寒い夜だからと、薪を取りに行く祐慶に告
げ、そして、留守中に自分の寢室を覗かないようにと念を押して出ていきます。

ところが従者は我慢できず、祐慶に戒められながらも寢室を覗いてしまいます。そこにはおびただしい数の死骸が山のように積まれていました。女は、安達ヶ原の黒塚に住むと噂の鬼でした。

慌てて逃げ出す祐慶らに、鬼に姿を変えた女が怒りに燃えて追いかけてきますが、祐慶らの祈りによって鬼女は夜嵐の音に紛れるように姿を消してしまいました。

新城の能

新城の能は新城の歴史とともに始まりました。長篠・設楽原の戦いの後、長篠城の城主であった奥平信昌は、徳川家康の娘亀姫と結ばれ、新しいお城を郷ヶ原に築きます。これが新城という地名の始まりです。そして、天正四年（一五七六年）、その落成祝いに観世与三郎を招き、城中二の丸で祝い能を催したのが始まりです。

その後、元文元年（一七三六年）、領主管沼定用の家督相続を祝い、富永神社で能を奉納しました。これが例となり、祭礼のときに地区の氏子が社前で能を奉納するようになりまし。富永神社には文政九年（一八二六年）に再建された能舞台（市指定文化財）があります。この境内で町衆によって二七〇年余り、現在も、祭礼能（市指定文化財）として綿々と続けられています。

薪能

この名称は、夜になって薪を炊いて、それを照明代わりに演能するところから来た名称ではありません。もとは「薪の神事」などと称して、新年に薪を寺社に献進する儀式で、一種の春迎えの信仰行事でした。

新城においては新城文化会館が完成したことを契機に、平成二年第一回「新城薪能」が催され、市民の間で大好評を博しました。新城薪能は、流派を問わず誰でも参加できる「能楽の里・新城」を目指して参りました。現在、日本全国で二百か所ほど薪能が催されていますが、新城薪能のように、シテ方、ワキ方、囃子方、狂言方の全てが素人というのはほとんど例を見ないといわれております。この新城に生きる能を、永い伝統を持つ祭礼能とともに、より市民の皆様へ愛されるように発展させていくことが私たちの願いです。